

《総 説④》

子どもの事故予防:子どもにケガは大切!でも命はしっかり守る!

NPO 法人 保育の安全研究・教育センター代表 心理学博士

掛札 逸美

【「事故予防」ではなく「深刻な結果の予防」】

日本では、いまだ「事故予防」という言葉が使われています。けれども、WHO を初めとして英語ではすでに、「傷害予防 (injury prevention)」が通例です。事故 (思いがけず起きた [= 不慮の] 悪いできごと) は必ず起きます。人間が「注意できない」「見守れない」「気をつけられない」脳¹⁾、「めんどくさい」「大丈夫」と思う脳 (楽観バイアス、後述) を持っている以上、これは当然。あるいは、落雷や地震など、人間にはどうしようもない力で悪いできごとが起こることもあるからです。

一方、「注意する」「気をつける」どころか、おとなが想像もしないことをしながら、さまざまなことを試しながら育っていくのが子どもです。子どもの事故自体を防ぐことはほぼ不可能です。

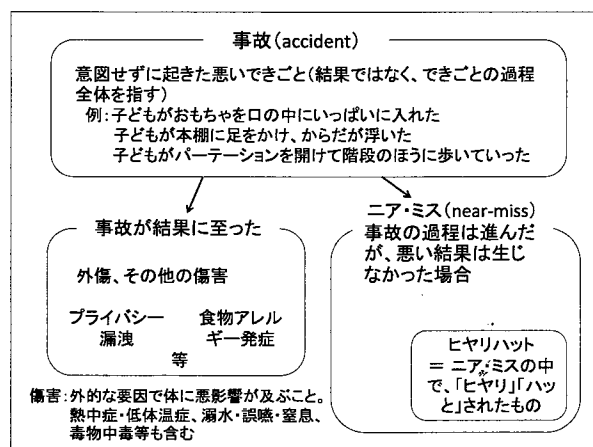
事故は起こる、しかし、その結果が深刻でなければよい。あるいは、深刻な結果をもたらす事故ができる限り起きないように取り組もう。これが「傷害予防」の考え方です (保育施設における「事故」にはアレルギー食材の誤食等も含まれますから、以降は「深刻な結果の予防」とします)。たとえば、交通ルールを教え、信号を置いても、車の運転者は信号を見落とししたり、無視したりして衝突します (= 事故予防は困難)。だから、事故は起きるという前提で、エアバッグ、シートベルト、チャイルドシートを使い、車内の人の命を守る (= 深刻な結果の予防) というステップに向かうわけです。

余談になりますが、安全 (健康) の心理学上、効果はエアバッグ>シートベルト>チャイルドシートの順になります。エアバッグは故障さえし

ていなければ、自動的に出てきます。シートベルトは装着する必要がありますが、今は未装着の場合、少なくとも運転席と助手席はアラームが鳴るので、装着せざるをえません (安全のためではなく、アラームがうるさいから。でも、結果的に装着すればよい)。チャイルドシートにはエアバッグやシートベルトのような機能がないため、自主的な装着を促すしかなく、「めんどくさい」「大丈夫」に負けてしまう可能性が高いのです。

【ヒヤリやハットするのは…?】

図1のように分けて考えると、「事故」をめぐる整理は明確になります。日本語ではよく「ヒヤリハット」という言葉が使われますが、ヒヤリハットはあくまでも人間が「ヒヤリ」「ハット」したもののこと。人間が気づかなかつたできごとや、気づいたけれどもヒヤリやハットをしなかつたできごとは、ヒヤリハットに含まれなくなってしまう。そのため、結果に至らなかつた事故は、英語で使われている「ニア・ミス」と表現しています。



【図1】「事故」の整理

実はここが、保育園における「事故予防」に私に関わり始めてしばらく後、気づいた点です。保育園ではヒヤリハットが数多く出てきます。そのほとんどすべては、転んだ、つまずいた、滑った、ぶつかった、はさんだ、かみつかれた、ひっかかれたなどの、ほぼ命に関わらないもの。ところが、こうしたできごとは頻発します。保育者の側にも「痛い！」や「血が出た！」という感情を引き起こします。それだけでなく、今の保育現場では「保護者に、なんて説明しよう」「赤くなってる。この子の親御さんは怒るなあ…。どうしよう」といった認知と感情も引き起こすのです。そのために、「ヒヤリ」や「ハッと」であっても報告につながっていきます。

一方、子どもの命に即関わるできごとは、めったに起きません。保育施設の場合、溺水、睡眠中の異常、誤嚥窒息、絞扼などがこちらに入ります。そして、こうしたできごとには、いわゆる「ケガ」で見られる軽度、中等度の結果が存在しないために、結果に至らなければ「まったく大丈夫だった」で終わってしまうのです。なんの結果も起きないために、ヒヤリハットとして報告されないことも多くなります。

人間には「これまで大丈夫だったのだから、これから大丈夫だろう」という認知バイアス（偽りの安心感 immunity fallacy²⁾）もありますから、「大丈夫だった」は、その後のリスク認知を歪ませてしまいもするのです。たとえば、食べ物や玩具の誤嚥はよく起きますが、たいていは大事に至りません。そうすると、「出るだろう」「これは詰まらない」「大丈夫」という認知バイアスが強まり、誤嚥窒息の危険を放置することにつながります。そして、ある日突然、どこかで誰かが、「詰まった！」「出ない！」に遭遇してしまうのです。

このように保育現場では、そもそも子どもの命に関わらないケガがらみのことばかりが意識にのぼりがちで、「次に起きたら死ぬかもしれない」ハザードやリスク³⁾は見逃されがち。これは家

庭でも同様でしょう。ここが、いわゆる「子どもの事故」を2つに明確に分ける必要性の根幹にあります。

【子どもにとってケガは大切】

もちろん、不要なケガをする必要はありません。けれども、子どもの育ちや学びの中で起こるできごとの中には、結果的にケガを起こすものがたくさんあります。たとえば、保護者の方からこう尋ねられたことがあります。「テーブルの上のホットプレートに子どもがさわって、やけどをしてしまったんですが、どうしたら防げますか？」「それからはさわらないでしよう？」「あ、今はさわりません」「じゃあ、いいんです、それで。今度さわりそうになったら、『この前みたいにアチチになっちゃうよ』って言ってください」「そう言うと、今もさわるの、やめます」。

この子はそのうちまた、同じホットプレートや別の鍋かなにかにさわって、「あ、これもアチチなんだ！ 痛いからやめよう」と学ぶでしょう。それを何回か繰り返せば、さわる前に「これは熱いかな、気をつけよう」と考えるようになります。人間にとって、痛みは命を守る上できわめて重要な感覚ですから、保護者に「熱いからやめなさい」「ケガをするからやめなさい」と言われて素直にやめていたのでは、痛みと、それに伴う学びは起きません。

そして、こういった学びは子どもの頃にたくさんしておくべきです。なぜなら、痛みを生じるできごとは、小さい時のほうが小さくて済む可能性が高いからです。プラスチックのナイフでバナナを切る練習をしている時、指を出して「痛い！」と感じれば、「先生が言うみたいに、猫の手にしよう」と学びます。本物の包丁を持ってこれを初めて学ぶのでは遅すぎます。あるいは、子どもの時のケンカ。「痛いからやめて！」「泣いちゃった、ごめん」…、力が小さい未就学児の間にこれを学んでおかず、小学校や中学校になって

初めてケンカをしたのでは…？「人の痛みがわかる」とよく言いますが、心理学上も脳科学上も、他人の痛みはわかりません。他人の痛みに共感できるとすれば、それは自分が似たような痛みを経験しているから、です。

転ぶ、つまづく、滑る、ぶつかる、はさむ、切る、落ちる（これだけは高さ、打ち所によっては死ぬ確率が高くなります）…、こうしたできごとは、子どもが自分のからだの動かし方を学ぶ上できわめて大切です。その結果として起こる外傷（骨折ぐらいは十分に起こりうる）は、当然のこととして容認する社会であることが必要です。そうでなければ、子どもは育つことができません。

【リスクを学べる環境づくり】

欧米でも、子どもを「守り過ぎる」ことから生じる弊害は指摘されています。たとえば、1970年代以降の米国で、公園遊具の安全性向上に尽力した Joe Frost 博士（テキサス大学名誉教授）は、次のように書いています。米国で子どもの肥満が増え、自分の失敗を他人のせいにする子どもや若者が増えた背景には、自分自身のからだと頭を使ってリスクの扱い方を学んでこなかったことがあるという主張です（図2）。

ケガをするようなすべてのリスクから、子どもを守らなければならない、これはおとなに共通する誤った認識である。現実の世界は、リスクにあふれている、金銭的、身体的、感情的、社会的リスク…。理にかなったリスクは、子どもの健康な成長のために不可欠である。リスクの扱い方を学ぶことは、子どもの認知・身体発達にとって不可欠であり、（その経験を通じて）チャレンジに満ちた環境から（子どもは）自分を守るようになっていく。子どもがリスクを扱えるように支援していくことは、おとながすべき重要な行動であり、それによって子どもは自分自身と、自分の行動の結果に責任をとれるようになっていく。

"The Dissolution of Children's Outdoor Play: Causes and Consequences", Joe L. Frost, Ph.D. (2006)



【図2】

一方、英国では現実的な取り組みが進んでいます。写真（次ページ左）の報告書を英国の国會議員グループが2015年に出し、それ以降、英国各

地に写真のような遊び場が次々と作られてきました。まるでゴミ捨て場のように見えるかもしれませんが、わざわざ作られたものです。遊び場として開放する前に、徹底した「リスク・便益分析」を行い、便益（子どもの学び）がリスクを上回り、リスクが許容範囲であれば、排除せずに設置します。専門のトレーニングを受けたおとなが常駐していますが、子どもとはまずめったに関わらないそうです。

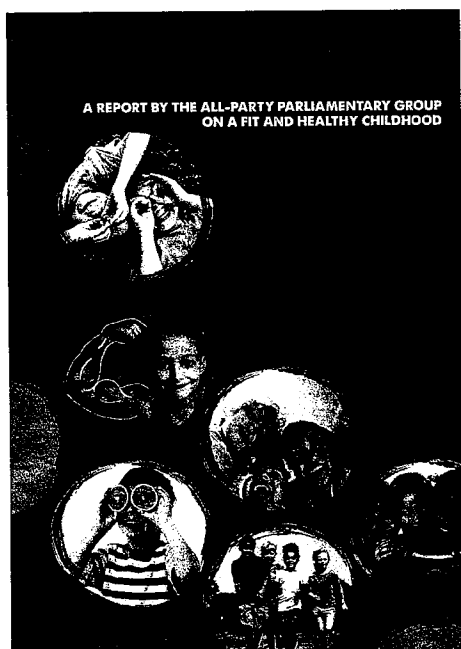
これがいわゆる「リスク・マネジメント」の考え方です。management は、control（コントロール、管理、制御）ではありません。あくまでも、「価値」と「リスク」のバランスです。リスクをゼロに近づけることばかりを考えていたら、価値を上げることもできなくなってしまう。保育や子育ての世界では、子どもが育つ価値を最大化しつつ、深刻なリスクの最小化を考え、容認すべきリスクは容認する必要があるのです。

【深刻事故を防ぐ：楽観バイアスが命取りに】

一方で、「リスク・コントロール」の考え方も必要です。こちらは、子どもの命や育ちにとって深刻な結果（例：死亡、脳障害等）を起こしかねないできごとであり、できごとに学びはほとんどありません。学びの価値はあったとしても、対価が大きすぎます（図3）。

溺れかけたら、水の中でふざけるのはやめようと思うかもしれません。スーパーボールを口の中に入れていて、詰まりそうになったら、もうやらないと思うかもしれません。でも、そう学ぶ前に数分で死んでしまう子どももいるのです。あるいは、自分が飛び出したとたん車に急ブレーキをかけたのを見て、「あ、車は止まってくれるんだ」と誤った学びをしてしまう子どもさえいるかもしれません。

特に、保護者は自分の子ども、家族に対して強い楽観バイアス⁴⁾を持っています。これは認知バイアス（ものの見方の歪み）のひとつで、確率・



右写真はすべて、“The Overprotected Kid”, Hanna Rosin, The Atlantic, April, 2014 から。

- ・睡眠中(特に0～1歳児):うつぶせ寝。口の中やベッドまわりの窒息ハザード
- ・誤嚥窒息:玩具、食べ物、飾り、磁石類
- ・誤飲:磁石やボタン電池の誤飲による内臓損傷
- ・誤飲:酒類や薬、灰皿の水、洗剤など毒物の誤飲
- ・水:浴槽、プール、河川・海、あらゆる「水がたまっている場所」
- ・高所からの転落:ベランダ、窓、遊具、階段
- ・交通事故:道への飛び出し、車の前後への走り出し
- ・やけど、服への火の燃え移り
- ・食物アレルギー(ただし、これはハイ・リスク児と対応が明らか)

【図3】子どもの命にとって深刻な結果をもたらすできごとのにはほぼ平等に起こる事故や病気などについて、「私(の側)は大丈夫」と根拠なく考えてしまうものです。このバイアスを司る場所が前頭葉にあることもわかっています⁵⁾。根拠なく「大丈夫」と思えることは個体の生存、種の進化、そして、子育てにとっても重要ですが、やはり、こちら側のできごとは「大丈夫」が命取りになるという点を理解しておく必要があります。

一方、保育施設の場合は、他人の子どもの命を仕事として預かっているわけですから、深刻事故に関する楽観バイアスを持つてはいけません。「これくらいは大丈夫」が子どもの命を奪うだけでなく、施設側の社会的責任にもつながるからです。

【価値と「死」が隣り合わせのものも】

けれども、すべてのできごとがリスク・コントロールとリスク・マネジメントの線引きできれいに分けられるわけではありません。もっとも典型的なのは、遊具からの転落です。同じ「高所」でも、ベランダからの転落は学びがゼロですし、窓に補助錠をつけることでかなり予防できるはずです。一方、遊具からの転落は、「こんなに登れるよ!」「ここで手を離したら危ないんだな」という学びと、万が一落ちて打ち所が悪ければ、たとえ1メートルでも死ぬことがあるという深刻なり、

スクが同居してしまうのです。

特に、登り棒に登ったり、鉄棒で少し難しい回り方をしたりというのは、そこまで登れる子ども、そこまでできる子どもだからこそすることです。子どもの頃の私のように登り棒にまったく登れない子ども、鉄棒ができない子どもは、決して落ちません。できるから試し、嬉しくてもっと試し…、たいていはそこで学びだけが積み重なっていくのですが、時折、「思わず」や「つい」が起きて死んでしまう子どもがいるのです。

では、登り棒を禁止するのか？ 高さがある遊具はすべて撤去するのか。そうなってしまったら、子どもは子どもでなくなりますし、育つことができません。試し、少し無理をし、おとなが「なんでそんなことを！」と思うような行動をすることで子どもは育っていくのですから、その中で確率的に（＝運悪く）、誰の責任でもなく死亡する子どもがいること自体は、（もちろんその子どもの保護者には容認できなくても）社会が認めざるをえないのではないのでしょうか。

これは、食べ物の誤嚥窒息でも言えます。つるりと喉に落ちてしまうような食物（丸のままのミニトマト、白玉団子など）を、まだ咀嚼がうまくいかない、むせることもできない子どもに与えることは危険とわかっているのに、「何歳以上であれば絶対に安全」とは誰にも言えないのです。口の中で転がして遊んでいるうちに喉に詰まり、背部叩打をしても胸部突き上げをしてもまったく出ない、救急隊が来ても…ということは、確率的に（＝運悪く）起こるのです。遊び、試す、が育ちそのものである子どもという生き物は、禁止しても（禁止すればするほど？）危険をおかすということを社会が理解する必要があります。

【「その園、保育士が悪かった」…？】

楽観バイアスゆえに、人間は「私の子ども（園）にひどいことは起きない」と思います。同時に、人間には「根本的な因果帰属推論の誤り」

（fundamental attribution error⁶⁾）という認知バイアスもあります。悪いことが誰かに起きた時、環境や確率の影響よりも本人に原因を帰属しようとする認知の歪みです。極端なのは、見知らぬ人に強姦された女性を指して「そんな所を歩いているからだ」と言うようなケースですが、これは事故の被害者に対しても働きます。「その子がいけなかったんでしょう」「親（保育士）が見ていなかったから」「あの園だから」…、このように言って環境や確率の影響を無視できれば、「私（たち）には起きない」と楽観バイアスを強化することもできるからです。

「その子が」「その保護者が」と言っていると、一方で、本来ならば安全にできるはずの環境や製品にも目が行きにくくなります。ただでさえ日本社会は泣き寝入りの文化ですから、保護者は企業や省庁に死亡事故を報告しません（欧米で死亡が起きている製品は日本でも被害が起きているはずですが、報告がない）。その環境や製品で子どもに深刻な結果が起これば、次の被害は予防できたかもしれません。たとえば、小児科学会のウェブサイト『傷害速報』⁷⁾を見ると、深刻事例には防げたはずの類似事例が多くあることがわかります。

環境・製品側の改善や対策を促すためにも、そして、根拠のない危険な「私（たち）は大丈夫」を減らすためにも、「その子が」「保護者が」から「もしかしたらうちの子にも」「うちの園でも」という認知を社会の中に育てていく必要があるでしょう。

【今、おとながしなければいけないこと】

自分の命の守り方を学び、一方で「これくらい、大丈夫！」「これ、すごく大変だけど、そんなこと、関係ない。挑戦する！」と言える子どもを育てることは、子ども本人にとっても保護者にとっても、社会にとっても重要です。守りに入った個体しかいない社会は、滅びるのが当然ですか、

ら。

子どもが自分では命を守れないできごと、子どもがまだ自分では判断できない深刻な危なさ。ここで子どもの命を守るのは保護者を含むすべてのおとなの責務です。ですから、子どもの命に関わる部分で保育者が安易に「大丈夫だよ」と言うてはいけないのです。でも、子どもの学びになるできごとであるならば、そして、それによって起こる結果がほぼ命に関わらないのであれば容認していく。深刻事故の予防に関わっている人間として、今、痛切に感じているのはこうした点です。

【参考文献】

- 1) たとえば、NPO 法人保育の安全研究・教育センターのウェブサイト (<http://daycaresafety.org/>) → 「安全に関するトピックス」 → 「1-5. 『見えない』を体験する実験」に選択的注意の実験用ビデオのリンク、実験のしかた、解説が書いてあります。ただし、このページを読んだ方には「見えない」は体験できなくなります。
- 2) Will, K.E. (2005). Child Passenger Safety and the Immunity fallacy: Why What We are Doing is Not Working. *Accident Prevention and Analysis*, 37, 947-955.
- 3) ハザードとリスクの違いや、下の 4) ～ 6) については、『子どもの「命」の守り方：変える！ 事故予防と保護者・園内コミュニケーション』（掛札逸美、エイデル研究所、2015）。
- 4) Weinstein, N.D. (1980). Unrealistic Optimism about Future Life Events. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 806-820. (インターネット上に原著の PDF もあります)
- 5) Sharot, T. Kanai, R., et al. (2012). Selectively Altering Belief Formation in the Human Brain. *Proceedings of the National Academy of Science*, 109, 17058-17062. (インターネット上に原著論文もあります)
- 6) Ross, L. (1977). The Intuitive Psychologist and His Shortcomings: Distortions in the Attribution Process". In Berkowitz, L. *Advances in experimental social psychology*. 10. New York: Academic Press. pp. 173-220.
- 7) 傷害速報、日本小児科学会こどもの生活環境改善委員会 <https://www.jpeds.or.jp/modules/injuryalert/>